C. F. マイアー『説教壇から撃つ』における予示について

馬場紀臣

Über die Vorausdeutungen in C. F. Meyers Novelle «Der Schuß von der Kanzel»

Toshiomi BABA

Abstract

In der Novelle «Der Schuß von der Kanzel» spielt der General Wertmüller eine große Rolle. Er war in C. F. Meyers Roman «Jürg Jenatsch» ein tüchtiger Adjutant des Herzogs Rohan. Er war spöttisch und redete besonders über Geistlichkeit schlecht. Er machte auch gern Späße. Aber er war kein Verräter und blieb dem guten Herzog Rohan treu. Diese Eigenschaften des Adjutanten kennt der Leser gut. Deswegen kann er auch dem General Wertmüller in der Novelle «Der Schuß von der Kanzel» glauben. Er braucht sich keine Sorge um das Ergebnis der unerhörten Begebenheit zu machen, weil das Spiel von dem zuverlässigen ‹Regisseur› Wertmüller inszeniert wird. Diese Wirkung vom vorangegangenen Werk soll ‹die Vorausdeutung des vorangegangenen Werkes› genannt werden.

はじめに

コンラート・フェルディナント・マイアー（Conrad Ferdinand Meyer）のノヴェレ『説教壇から撃つ』（«Der Schuß von der Kanzel»）（1878 年）の梗概をヴィルヘルム・オルプリッヒはおおよそ次のように紹介している。[1)]

十月のある日、ユーティコン（Ütikon）の学位志願者ローベルト・プファンネンシュティール（Robert Pfannennstiel）は、遠縁のルードルフ・ヴェールトミュラー（Rudolf Wertmüller）将軍を柏の木の茂る岬にある彼の家へ、彼のヴェネチアの部隊の従軍牧師の職につきたいと申し出るために、湖を渡って訪ねて行く。オデュッセイアの象徴的表現についての自分の学位論文を、彼は将軍にすでに送っていた。

予期に反して彼は、一般にへそ曲がりとして「いら草」と罵られているヴェールトミュラーから、愛想よく迎えられ、たっぷりご馳走され、精神的に刺激された談話の後、客として引き止められて泊まる。さすがに、この察しのいい軍人は、まもなくこの内気な、あまり男らしくない学位志願者プファンネンシュティールが、副牧師として仕えていた将軍の従兄弟であるミュティコン（Mythikon）の牧師ヴィルペルト（Wilpert）の娘、すらりとした、優雅な、心の真直ぐなラーエル（Rahel）に惚れ込んでいることを見抜く。偶然、同じ日の夕方ラーエルが将軍を訪ねて来て、将軍が狩猟と武具の虜になっている彼女の父親を、またもや、日曜日の午後ずっと鴨を追いかけて銃を撃つよう唆したので、将軍を非難する。けれども、最後には、代父であるこの将軍が「リューベツァール」となって、この愛すべき「点景人物」ラーエルの選択に委ねる三つの願いで話し合いがつく。ラーエルは、父親の聖職者にふさわしくない狩猟欲を治すこと、学位志願者をミュティコンの牧師にすること、そして自分を彼の妻にすること、を彼に依頼する。

そのために、ヴェールトミュラーはとてつもないいたずらを考え出

1) 以下の梗概はヴィルヘルム・オルプリッヒ（Wilhelm Olblich: Der Romanführer. Bd. 2. Der Inhalt der deutschen Romane und Novellen von den Anfängen bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts. 2., neu bearbeitete und veränderte Auflage: Anton Hiersemann 1960. S. 415.）に依る。ただし、多少の変更を加えた。なお、梗概中の引用文は後に挙げる今井訳による。

す。プファンネンシュティールが、ラーエルの顔をしたなまめかしい東洋の女の悪夢に悩まされ、完全に目を覚ましたときには、将軍はすでに日曜日の早朝ミュティコンへ向かって歩いている。彼は丁度教会へ急いでいる従兄弟の牧師に、プレゼントしたいというヴェネチア製の傑作である美しい見事なピストルを見せる。残念ながら撃鉄が起こしにくい。それゆえ、牧師は、その間に将軍がそれを同じ型だが、軽く作動する別のピストルと取り替えたのに気づかず、それを自分の上着のポケットに突っ込む。

押え難い情熱が説教壇の牧師を落ち着かせない。会衆が歌っている間、彼はピストルを弄んでいる。そして自分の説教で丁度「大きな響きで神をほめたたえよ」という言葉へ来たとき、説教壇からの射撃が轟音を響かせ、「青い硝煙は教区民の上に香煙のようにただよっていた。」ヴェールトミュラー牧師は、ただ将軍の愛想のよい介入のおかげで、自分の「説教」を終らせることができるのを感謝しなければならない。しかし、クラッハハルダー（Krachhalder）老人に率いられた教会の長老たちは、ひどく憤慨し、この教会に対する冒瀆を厳しく罰することを要求した。そのとき、自分の遺言を公表することによってすべての難問を解決するのは、またしても将軍である。すなわち、ミュティコンの村人は彼らの森林にくい込んだ彼の所有地の先端部を得る。その代わり、射撃を永遠に完全に口にしない。射撃好きの牧師は職を辞し、島の館に住んで狩り場と兵器室の管理を引き継ぐ。彼の後継者は学位志願者プファンネンシュティールがなる。ラーエルは三千チューリヒグルデンを得、牧師夫人となる。

こうしてミュティコンの射撃は片付けられた。しかし、将軍はもう翌日には前線に向かい、二度と帰ることはなかった。ある小さなドイツの町で、「ちょうど真夜中に、彼は風変わりだった一生の、最後の息を吐いた」。

ベンテリ（Benteli）社の史的批判版全集の『説教壇から撃つ』[2)]は、物語の最初から末尾まで54頁であり、11の章から成り立っている。各章とも 平均

2) テキストとして Conrad Ferdinand Meyer: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. v. Hans Zeller und Alfred Zäch. Bd. 11. Bern: Benteli 1959. S. 75 - 130. を使用する。なお、テキストの訳文、訳語は今井寛訳（『説教壇から撃つ』

4.9 頁と短く、第四章、第十一章が共に 9 頁と比較的長いが、第四章にはノヴェレにとって意味深いヴェールトミュラー将軍の夢の話が含まれており、第十一章はいろいろな出来事の解決の章だからである。11 章という外的構成と、物語の内的構成である物語相が合致していると言い得る。

梗概から明らかなように、この物語の語られた時間は 2 日である。第一章から第七章まで（34 頁）がほぼ一日目、第八章から第十一章まで（20 頁）がほぼ二日目である。ほぼ、というのは第七章末の数行は第二日目の朝、目覚めたプファンネンシュティールの様子の描写であるからである。

1

このノヴェレの最も大きな特徴は、何と言ってもそのタイトルである。読者は『説教壇から撃つ』というタイトルに大きな衝撃を受ける。強烈な予示力である。タイトルの導入的予示についてはレンメルトが論じているが[3]、小説史上でも『説教壇から撃つ』は読者に最も衝撃を与えるタイトルの一つであろう。われわれは、先ず最初に、われわれのこのノヴェレのタイトル『説教壇から撃つ』の予示力につて考察しよう。

「説教壇から撃つ」という「未曾有の事件」がこの物語の筋の一つの頂点、大頂点であるとは、読者は誰でも想像するであろう。そこで読者の興味は、いつ、どのような原因・経過で、どこで、誰が、誰に向かって撃つか、という点に注がれる。劇的な、波瀾を予想させるタイトルである。木村毅氏はその著『小説研究十六講』において「大契点」[4]という言葉を使っているが、われわれの作品のタイトルは、まさにその大契点を予示していると言える。

「説教壇から」と言うからには、「誰が」は説教をする人、つまり聖職者と考えられる。聖職者以外の者がなんらかの理由でたまたま説教壇から撃ったとしても、それはタイトルにはならないであろう。「説教壇から」には、聖職者が説教しつつ、という意味が込められているとみるべきである。

世界の文学 54 『ドイツ名作集』第 3 版　中央公論社　昭和 43 年）を使用させていただくが、登場人物名の表記や、訳語、その他を変更させていただいた箇所もある。引用文の末尾の括弧内の数字はそれぞれの頁数を表す。

3) Vgl. Eberhard Lämmert: Bauformen des Erzählens. Zweite, durchgesehene Aufl. Stuttgart: J.B. Metzler 1967. S. 139ff.

4) 木村毅著『小説研究十六講』恒文社 1980 年　S.190.

すると、まずは「誰か」は作品の冒頭から登場するプファンネンシュティールと考えられる。冒頭の二人の僧の会話の最初の言葉は、ローゼンシュトックの「プファンネンシュティール、君の計画は無茶だ」(244)(«Pfannenstiel, dein Vorhaben entbehrt der Ver-nunft!»(77))であり、この無謀な「計画」の実行とタイトルの予示が関連づけられるからである。しかし、直ちに「誰が」にもっとふさわしい人物が話に出て来る。「彼[=将軍]のいとこのミュティコンの牧師は、年取った子供で、猟犬や猟銃を集めたり、しょっちゅう、ずどんぱちんとやっては、われわれ牧師仲間の社会的信用を落としている。」(245)([...] sein Vetter, der Pfarrer von Mythikon, das alte Kind,bringt unsern Stand in Verruf mit seiner Meute, seinem Gewehrkasten und seinem unaufhörlichen Puffen und Knallen.(78))とローゼンシュトックが話す。

第四章ではヴェールトミュラー牧師に追放された理由をプファンネンシュティール自身が、「『あちらのヴェールトミュラーさまは、もともとわたくしをひいきにしてくださった人です。わたくしが職を解かれたのは、銃を扱う心得がなくて、それをこわがったためなのです。[...] あの方は、どうしてもいっしょに撃って的にあてろとおっしゃるのですが、わたくしには一発もあてられませんでした』」(258)(«Der Herr Wertmüller, sonst mein Gönner, hat mich verabschiedet, weil ich mit Schießgewehr nicht umzugehen verstehe und mich auch davor scheue. [...] Er nötigte mich, mit ihm in die Scheibe zu schießen, und ich habe keinen Schuß hinein gebracht.»(94))と述べている。

さらに第五章では、このミュティコンの牧師の娘ラーエルが、「『このまえの日曜日にはまた、たいへんな大騒ぎだったわね。おじさまが誘惑したおかげで、父はいっしょになって午後中、あなたのアウ池で鉄砲を撃っていたわ。』」(261)(«Was war das wieder für ein Spektakel vergangenen Sonntag! Durch Eure Verleitung hat er den ganzen Tag mit Euch auf Euerm Au-Teiche herumgeknallt.»(98))とおじの将軍を非難する。そして、「『そのうち父は、鉄砲に弾丸をこめて説教壇にあがったりするかもしれない』」(262)(«Nächstens wird er noch einmal mit geladenem Gewehr die Kanzel besteigen!»(99))というラーエルの口にした不安に対して、「『鉄砲に弾丸をこめて説教壇にあがる?』と、ヴェールトミュラーは繰り返して言ってみたが、その考えに彼は注意をひかれたようだった。」(262)(«Mit geladenem Gewehr die Kanzel besteigen?»wiederholte Wertmüller, den dieser Gedanke zu frappieren schien.(99))と述べられており、ここで「誰が」が読者には決定的となる。

さらに、将軍が「『いいかね、明日、わたしは君たちの教会に行く — それ

でお父上の名誉は町でも村でも回復することになるだろう』」(262)（«Weißt du was? ich gehe morgen bei euch zur Kirche — das rehabilitiert den Vater zu Stadt und Lande.»(99)）と言っているので、この時点で、＜いつ＞、＜どこで＞も読者にも分かってくる。

この時点までの物語のストーリーと語り手の語り口調から、「説教壇から撃つ」という行為には、最初タイトルのみから受けた深刻さが感じられない。この将軍とラーエルの対話から「誰を」が、少なくとも特定の人物でないことが予想される。

残るのは「どのようにして」である。読者の興味はその一点に集中される。そして「どのようにして」を演出するのはヴェールトミュラー将軍である。やはりラーエルとの会話中にいたずらが浮かんで来る。「ポケットのなかの二つのピストルに触れた。彼の鋭い灰色の目に、ぱっときらめくものがあった。」(So berührte er die beiden Pistolen in seinen Taschen; es blitzte in seinen scharfen grauen Augen plötzlich auf [...])「将軍は、気を鎮めた。いま思いついたたくらみと、それがうまくいくかどうかどうかを、切れる頭脳で調べているようにみえた。冒険だが、やってみることにした。」(264)（Der General beruhigte sich. Er schien seinen Anschlag und die Möglichkeit des Gelingens mit scharfem Verstande zu prüfen. Das Wagnis gefiel ihm.(101)）こうして＜演出家＞の案は成った。

「説教壇から撃つ」は、第九章で実際になされるのであるが、この第九章の基本構造をクラウス・ツォーベルは次のように分析している。[5)]

導入部	導入的な場所の叙述：内陣のクラッハハルダーの座席、 将軍の椅子、説教壇の位置、聖歌の特徴と節の構成の概要
	「喜びおどれよ、喜びおどれよ！……」 (「牧師は…そっとポケットをおさえていた。」)
高まる 緊張	「トロンボーンを吹けよ、トロンボーンを吹けよ！……」 (「いとこは、小さい拳銃をポケットから取り出していて…」)

5) Klaus Zobel: Unerhhörte Begebenheiten. Interpretationen und Analysen zu drei Novellen des 19. Jahrhunderts. S. 28f. なお、以下の図表中の『説教壇から撃つ』第九章からの引用文はテキスト S.115 - 117, 訳書 274 - 276 頁。

「トランペットを吹けよ、トランペットを吹けよ！……」
(「…かちっという鋭い音［を聞いた。壇上で］撃鉄をおこしたようだ。」)

「そしてフリュートを吹けよ、おーフリュートを吹けよ！……」
遅らせる要素　(「…牧師は…指を引き金にあてたところだった。…けれども彼は、すぐにまた指を引っ込めた…」)

詩篇第四十七篇
(牧師は「…小さな武器をもとどおり大きいポケットにすべりこま」せる…)

説教の始まり：
「大きな響きで神をほめたたえよ」
頂点　(「牧師が…好きでたまらぬ拳銃を［…］また引っぱりだしていたのだ。」)
と　「…と、そのとき、ばあん［！］とものすごい銃声がひびいた。」

危機　会衆の反応：
「事態は容易ならぬものとなった」

会衆に向かっての将軍の
解決の準備　鎮めるスピーチ

説教の継続、秩序の
差し当たっての回復

ツォーベルは、「クライマックスと段階的高まりの構想の点で、頂点と危機を際立たせる点で、並びに、差し当たっての解決という点で […] ドラマ的に構想されている。ただ、描写のスタイルが語り手のイローニッシュな基本的態

度によって特徴づけられている、ということを見逃すべきではないであろう。教会での寸劇（Dramolett）は緊張に満ちたお膳立てにもかかわらず明るい滑稽な出来事のままである。この出来事は読者をそれほど筋の出来事の流れの中へ巻き込まない。そうではなく、読者をしてむしろ劇（Spiel）をある程度楽しませる距離から見守らせる。」[6] と述べているのは正当である。

2

小説にしろ、ノヴェレにしろ、物語文学作品では必ずその作品の世界で何か問題が生じるか、あるいはすでに生じている。そしてそれらがいかに解決、解消されるか、を読者の眼前に展開する。

プファンネンシュティールがローゼンシュトックの反対を押し切って、ヴェールトミュラー将軍に彼のヴェネチアの部隊の従軍牧師の職を求めて会いに行く、というところからわれわれの物語は始まるのであるが、この職を求めるのは彼のラーエルに対する失恋のゆえ、もっと詳しくいえば、銃を扱えず、銃に狂った彼女の父親に拒絶されたからである。したがってこの物語の先ず第一の問題は、プファンネンシュティールとラーエルの恋の成就である。

第二は、この銃に狂った父親である。何といっても牧師であるから、その職業は彼のこの好みとは正反対であり、住民はもちろん、娘の心痛の種である。この問題の解決なくしては住民も娘も落ち着いた暮らしができないであろう。

第三は、教会の長老クラッハハルダーに代表される住民の宿望である。その願望する相手はヴェールトミュラー将軍であり、その対象は村有林の真ん中に張り出している将軍所有の森の先端部である。

そして最後に第四は、将軍その人自身の存在である。将軍が彼の領地アウに帰郷して以来、村の住民は落ち着けない。各人それぞれの理由で落ち着けないでいる。

3

学位志願者プファンネンシュティールとラーエルの恋の行方が、この物語の少なくとも表舞台での第一の筋である。プファンネンシュティールのラーエルに対する気持は自明であるが、第四章に至って、語り手は「じつはラーエ

---

6) Ebd., S. 29f.

ルは自分を心から好いていると信じて疑わなかった」(258) ([...] daß die Rahel — wie er [= Pfannenstiel] daran nicht zweifeln konnte — ihm herzlich wohl wolle. (94)) とプファンネンシュティールの心中を報告している。また同じ章で登場する当のラーエルの態度からもそのように思われる。第五章で全く明白になる。

この恋の障害はラーエルの父親である牧師である。だが、父親とて「もともとプファンネンシュティールをひいきにしていた」のである。「昨年の春まで」勤めていた父親の下での副牧師の職を解任されたのはプファンネンシュティールに銃を扱う心得がなかったからであるという、通常は考えられない理由である。この場合、解職とは彼にとっては失恋を意味している。

恋の障害も具体的に言えば、牧師の銃狂いである。第一の問題の解決は、第二の問題の解決でもあるのである。牧師の銃狂いについては、すでに挙げた第一章でのローゼンシュトックの言葉、第五章での「この前の日曜日の」大騒ぎにつてのラーエルの言葉のほか、さらにラーエルは父親の鉄砲好きについて次のようにその前途を憂慮する。

> «Und mit Recht; denn ein Geistlicher, der wachend und träumend keinen andern Gedanken mehr hat als Halali und Halalo, muß jeder christlichen Seele ein tägliches Ärgernis sein. Das wächst mit den Jahren. Neulich da der Herr Dekan seinen Besuch meldete und zur selben Zeit der Bote eine in der Stadt angekaufte Jagdflinte dem Vater zutrug, mußte ich ihm dieselbe unkindlich entwinden und in meinen Kleiderschrank verschließen, sonst hätte er noch — ein schrecklicher Gedanke — den ehrwürdigen Herrn Steinfels aufs Korn genommen.» (99)
>
> (「僧侶というのに、寝てもさめても、仕とめた、ばんざい、それしか頭にないんだから。だれだって怒るのが当然だわ。それも年を追ってひどくなるの。このあいだも、主任牧師さまがいらっしゃったちょうどそのときに、使いの者が、町で買い入れた猟銃を父のところにもってきたので、父には悪かったけれども、わたくし、その銃を取り上げて自分の衣裳戸棚に仕舞いこんでやったんです。そうしなかったら — とても恐ろしい考えだけれど — シュタインフェルス主任さまに狙いをつけかねなかったの。」) (262)

ここまで来ると、もう確かに限度を越えている。娘ラーエルが続けて、「そのうち父は、鉄砲に弾丸をこめて説教壇にあがったりするかもしれない」と憂

れうるのも、むべなるかな、である。

かくして、先きにみた「説教壇から撃つ」の将軍のたくらみは二つの問題を一挙に解決するはずである。

ところで、この作品において重要な役割を担っている二つのピストルであるが、これはマルティーン・プファイファーが指摘しているようにように[7]、このノヴェレの「鷹」である。また、ペアとなったこのピストルは、『尼僧院のプラウトゥス』の二つの十字架を思わせる。ピストルの場合には、一方は調子の良くないもの、もう一方は良いもの、十字架の場合には、一方は偽物の軽いもの、他方は本物の重いものであった。ピストルも十字架もそれぞれ二つともが完全なものであってはいけないのである。どちらの作品においても<取り替え>というのが重要な要素になっている。

ペアと言えば、ヨハンネス・クラインはこのノヴェレに二丁のピストルのほか、さらに、相愛の二人プファンネンシュティールとラーエル、将軍と牧師の二人のヴェールトミュラー、二つの森林を指摘している。二つの森林とは将軍所有の森林によって二つに分けられた村所有の森林であり、それが将軍の遺言によって、くい込んで二つに分けていた将軍所有の森林も村所有のものとなることにより、分けられていた村所有の森林が、ちょうど愛する二人がそうなるのと同じように、合一するのである。[8]

さて、この二丁のピストルが絡む「説教壇から撃つ」という将軍のたくらみに関して、ツォーベルは「彼［＝将軍］の意図は明らかである：ミュティコンの牧師の職のミスキャストは解決されなければならない。湖畔のちょっとした人事異動によって、やたらピストルを撃ちたがる従兄弟に新しい役目が割り当てられる。その役目は彼の好戦的な本性に完全に合致し、自分自身を否定するよう強いるものではない。一方、プファンネンシュティールは牧師という実入りのいい閑職を譲り受けることによって活動分野が開かれる。この分野で彼はラーエルと一緒に彼の一般市民の、キリスト教徒としての美徳と文学的好みの生活を送ることができる。」[9]と叙述している。

---

7) Vgl. Martin Pfeifer: Erläuterungen zu Conrad Ferdinand Meyer. Der Schuß von der Kanzel. Die Hochzeit des Mönchs. Die Richterin. 5., erweiterte Aufl. Hollfeld/Obfr.: C. Bange 1981. S. 33.

8) Vgl. Johannes Klein: Geschichte der deutschen Novelle. Von Goethe bis zur Gegenwart. Vierte, verbesserte und erweiterte Aufl. Wiesbaden: Franz Steiner 1960.

9) K. Zobel: a. a. O., S. 27.

4

「説教壇から撃つ」という将軍のたくらみは二つの問題を解決させるためのものであったが、「説教壇から撃つ」という前代未聞の出来事も、解決されねばならない。しかも急を要する。この解決の、いわば、絶対的切り札となるのが村有林の中の将軍の所有地である。これは、村民の宿望と言われている。この宿望は、第三章において将軍とクラッハハルダーの会話においてクラッハハルダーから持ち出されるが、その際クラッハハルダーは実に慎重である。用心深く相手の様子をうかがった後、珍しく上機嫌なのを見て、口にする。しかし、クラッハハルダーの最初の言葉「ヴェールトミュラーさま、ヴォルフガングにあるあなたの森林のことですが」(251)（«Euer Forst im Wolfgang, Herr Wertmüller»(87)）で、将軍の態度は一変する。「将軍の顔はさっと曇った。相手の老農夫には、雷雲が立ちのぼるのが見えるようだった。」(251f.) (Der General verfinsterte sich plötzlich und der alte Bauer sah es wie eine Donnerwolke aufsteigen [...] (87)) と述べられており、激怒して身構え、「『ミュティコンの住民はわしから強奪をする気か？』(252)（«Wollen mich die Mythikoner plündern?»(87)）と叫びさえする。

この場面からはミュティコンの住民の宿望の達成の見込みは皆無と思われる。ただ、将軍には住民の宿望の存在を知ることになる。この問題によって将軍は住民の弱味、絶対的弱味、を知り、住民に対して絶対的な強みを持っていることを知る。かくして、これが将軍にとって「説教壇から撃つ」事件の解決の切り札となるのである。

5

最後の問題は将軍自身の存在である。将軍のヴォルフガングの所有地がミュティコンの住民にとって大きな障害であるように、将軍の帰郷そのものが、やはり、ミュティコンの住民の平穏な生活を乱している。ユーティコンの牧師ローゼンシュトックは怒って言う。

> «Vorgestern» [...] «Seit er wieder hier ist — nicht länger als eine Woche — , hat der alte Störefried richtig Stadt und See in Aufruhr gebracht. Er komme, vor dem nächsten Feldzug sein Haus zu bestellen, schrieb er von Wien. Nun er kam und es begann ein Rollen von Karossen am linken

Seeufer nach der Au zu. Die Landenberge, die Schmidte, die Reinharte, alle seine Verwandten, die den ergrauten Freigeist und Spötter sonst mieden wie einen Verpesteten, alle kamen und wollten ihn beerben. Er aber ist nie zu Hause, sondern fährt wie ein Satan auf dem See herum, blitzschnell in einer zwölfrudrigen Galeere, die er mit seinen Leuten bemannt. Meine Pfarrkinder reißen die Augen auf, werden unruhig und munkeln von Hexerei. Nicht genug! Vom Eindunkeln an bis gegen Morgen steigen feurige Drachen und Scheine aus den Schlöten des Auhauses auf. Der General, statt wie ein Christenmensch zu schlafen, schmiedet und schlossert zuweilen die ganze Nacht hindurch. [...] die Funkengarbe spielt ihre Rolle und wird als Straße des Höllenfürsten durch den Schornstein viel betrachtet und reichlich besprochen. So wuchs die Gärung.»(79f.)

(「一昨日のことだ」」[...]「将軍がここに帰ってきて、まだ一週間にもならないが、以来このしょうのない平和攪乱者のおかげで、町ばかりか湖まで全く大騒ぎのありさまだ。次の戦に出るまえに資産を整理して遺言状を書くために帰国する、とウィーンから書いてよこした。さて、ご帰館になる。と、湖の左岸では水郷のアウ岬へ向かって次々と公式馬車が走っていき始めた。ランデンベルクにシュミットにラインハルトの連中、これまではこの無神論者で皮肉屋の老人を悪疫患者のように避けてきた親戚が、残らずやってきて彼の遺産にあずかろうとしたのだ。ところが彼は一向に家にいないで、湖を船でぐるぐる悪魔のように走り回っている。櫂十二本のガレー船に自分の部下を乗り組ませて、ものすごい速度で漕がすのだ。ぼくの教区民は目を見張る。不安になって、これは妖術だ、などとひそひそ語り合う。それだけではないのだ。日が暮れてから朝方まで、火の龍や鬼火がアウの邸の煙突から立ちのぼることがある。ふつうの人間のようには眠らずに、将軍がときどき一晩じゅう鍛冶仕事をして錠前をつくるのだ。[...] 光の束がその役目のとおりに煙突を通って悪魔の通路になっている — それをたくさんの人が見てさかんに取沙汰したのだ。人々の興奮が高まってきた」)」(246f.)

さらに、影響を受けたのは一般の住民だけでなく、牧師も将軍に「誘惑」され、鉄砲を撃って大騒ぎになったことは、すでに述べた。

将軍は領地こそこの柏の木の茂った岬にあるが、普段は居住していない。住

民と違って普通は教会にも通わない。住民にとっては別の世界の人である。将軍の出現、ミュティコンに存在することそのものが、住民を落ち着かせないのである。この作品の世界では解決されなければならない問題である。

この問題に関しては、第五章の結末で将軍自身がラーエルに、「『わたしは、月曜日の朝早く出発する』」(265)(«Ich verreise Montag in der Frühe.»(102))、と明言する。

すでに述べたようにこの物語は二日間の出来事が提示されている。土曜日と日曜日である。したがって、月曜日というのは、この発言の時点では明後日ということになる。将軍は最後の出征に出掛けるのである。将軍がこの村を去れば、この村の住民にはまた平穏が訪れるであろう。少なくとも、また将軍が帰郷するまでは。だが、結果としては今度の帰郷が最後となる。物語の末尾において語り手の報告がある。

> Sein Ende war rasch, dunkel, unheimlich. Eines Abends beim Lichteranzünden ritt er mit seinem Gefolge in ein deutsches Städtchen ein, stieg im einzigen schlechten Wirtshause ab, berief den Schöffen zu sich und ordnete Requisitionen an. Ein paar Stunden später wurde er plötzlich von einem Krankheitsanfalle niedergeworfen und Schlag Mitternacht hauchte er seine seltsame Seele aus. (130)
>
> (将軍の最期は急だった。それは謎めいた、不気味なものだった。ある夕方、灯ともしごろに、彼は従者を連れてある小さなドイツ人町に馬で行った。そこに一つしかない粗末な旅館に泊まることにすると、陪審員を呼びよせ、徴発の指図をした。二、三時間後、突然何か病気の発作で倒れ、ちょうど真夜中に、彼は風変わりだった一生の、最後の息を吐いた。)(286)

この結末の報告の後、物語を振り返ってみると、先ず思い出されるのが、第四章でのヴェールトミュラー将軍がプファンネンシュティールに話す「昨夜」の夢の話である。これは将軍の死のもっと強烈な予示である。

将軍は巨人と葬式に参列している。誰の葬式か分からない。誰のための鎮魂ミサか分からない。背の低い将軍は爪先で立って見る。

> «Jetzt unterscheide ich deutlich in den Ecken des Bahrtuches den Namenszug und das Wappen des Jenatschen und im gleichen Augenblicke

wendet er, neben mir stehend, mir das Gesicht zu - fahl mit verglühten Augen. <Donnerwetter, Oberst>, sag´ ich , <Ihr liegt dort vorn unter dem Tuche mit Euern sieben Todeswunden und führt hier einen Diskurs mit mir! Seid Ihr doppelt? Ist das vernünftig? Ist das logisch? Schert Euch in die Hölle, Schäker!> Da antwortete er niedergeschlagen: <Du hast mir nichts vorzurücken - mach dich nicht mausig. Auch du, Wertmüller, bist tot.>»(92)

(「棺布の隅にはっきりとイェナッチュの頭文字と紋章を見ることができた。それと同時に、わたしの隣に立っている男が、こちらに顔を向けた — 顔は土色で、目には光がなくなっていた。わたしは言う、『これはどうだ。隊長、あなたはあの前のほうでは、棺布の下に七つの致命傷を負って横たわっている。だが、こちらではわたしと話し合っている。あなたは二人いるのか？そんなことが考えられるか？そんなばかなことがあるか？ふざけるな、地獄に行ってしまえ』すると、彼は悄然と答えた、『おまえがわたしを非難することはない。威張るな。ヴェールトミュラー、おまえだって、死んでいるのだ』」) (256)

これを聞かされたプファンネンシュティールは「ぞっと寒気をおぼえた」(Pfannenstiel überlief es kalt.) と叙述されており、これを「ただならぬ前兆」(von ernster Vorbedeutung) と思う。また、「一方ヴェールトミュラーも自分の夢を語ったあと、すぐにはこの夢から離れられないでいた。」(Auch Wertmüller konnte seinen Traum, nachdem er ihn einmal mitgeteilt, nicht sogleich wieder los werden.) 愛人によるイェナッチュの死に触れたあと、「戦死 — 結構だ。しかしベッドの隅でくたばるなどは、ご免こうむる」(«Fallen — wohlan! Aber nicht in einem Bettwinkel krepieren!») と独り言を言う。この後、「彼は毒殺のことを考えていたのかもしれない。ウィーンの宮廷で執拗な陰謀劇にまきこまれて、自分の野心のため、不倶戴天の敵をこしらえてしまったのだ。」(256) (Vielleicht dachte er an Gift, dem er war am Hofe zu Wien in ein hartnäckiges Intrigenspiel verwickelt und hatte sich dort durch seinen Ehrgeiz Todfeinde gemacht.(92)) と語り手の言葉がある。

同じように無気味さを感じさせるのが、第七章の将軍の部屋の前の骸骨の歩哨である。

[...] ein Skelett, das die Knochenhände auf eine Muskete gestützt hielt

und an dem über die Rippen gekreuzten und blank gehaltenen Lederzeuge Patrontasche und Seitengewehr der zürcherischen Landmiliz trug. Ein kleines dreieckiges Hütchen war auf den hohlen Schädel gestülpt.(107)

（骸骨は、骨の手を火縄銃の上に載せ、肋骨には十文字に帯革をかけていた。そのぴかぴかに磨いてある帯革には、チューリッヒ地方民兵の使う弾薬盒と銃剣がついていた。中空の頭蓋は、小さな三角帽子をかぶっていた。）（269）

やはりこれも将軍の死の予示とみなされ得る。そもそも、将軍が帰郷したのは、「次の戦に出るまえに資産を整理して遺言状を書くため」であった。遺言状は死を前提とするものであるから、遺言状やそのための帰国そのものも、予示とみなされ得るであろう。

以上指摘した将軍の夢の話、骸骨の歩哨、遺言状とそのための帰国は、読者には容易く感じ取られる予示であるが、ツォーベルは、将軍の近い死を指し示す種々の予示と徴候は、すでにノヴェレの冒頭の自然描写で始まっていると言う。冒頭では秋の風景を生じさせ、夏と秋の区別がはっきりしてくる、と言い、次の文を挙げている。

[...] leere Weinberg. Die Lese war beendet. Zur Rechten und Linken zeigte der Weinstock nur gelbe oder zerrissene Blätter [...] (77)

（[途中の] ぶどう畑には、もう実がついていなかった。ぶどう摘みの季節は終わっていたのだ。左右のぶどうの木には黄ばんだ葉か、ちぎれた葉しかついていなかった [...]）（244）

また、湖も成熟と調和のとれた完成へと達した自然という心を和ませるイメージあるいはそれどころか牧歌的なイメージさえない。「酒神にふさわしい風景」(bacchische Landschaft) も最早なく、今は一年の最後の場面の気配がする、と述べ、次の描写を挙げている。

Heute aber blies ein heftiger Querwind und die durch grelle Lichter und harte Schatten entstellten Hochgebirge traten in schroffer, fast barocker Erscheinung dem Auge viel zu nahe. (77)

（ところが今日は、強風が横なぐりに吹きつけてくるし、高い連山は、ぎらぎらした光と強い陰影のために形を損じて、けわしい姿、ほ

とんど怪奇な姿となって、あまりにすぐ眼前に迫っていた。）（244）

ツォーベルはプファンネンシュティールとローゼンシュトックの会話、クラッハハルダーと将軍の会話で話される遺言状などに論及し、「具象的な予示、旅立ちと世俗的な物事の遺言による整理について繰り返し言及されることによって、ノヴェレの第二のテーマ［＝死のテーマ］が感じとれる」と述べ、「このテーマは最初から取り上げられ、それから首尾一貫して遂行される」と指摘している。ツォーベルは、われわれがすでに指摘した将軍の夢の話の場面（第四章）、制服を着た骸骨の場面（第七章）についても、もちろん詳述しているが、さらに、第八章の将軍が教会へ行くことが話題となるとき、「この将軍ならば首尾を貫き、敢然と身を滅ぼすことを、彼らは疑わなかった。」（272）（sie trauten es dem Generale zu, daß er konsequent bleibe und resolut ins Verderben fahre.(111)）や、さらに第九章において教区民に対する将軍のスピーチを挙げている。さらに、「ノヴェレの結末は死のテーマによって全く決定的に規定されている、しかも将軍の遺言の開示によって、アウへの彼の訪問のための切っ掛けであった彼のあの最終的な遺言による身辺の整理によって規定されている。」と論じ、「死のテーマはすでにこのノヴェレの第一段落において導入される、最初はまだ間接的に、以下の各章では、なかんずく第四章において、それから非常にもっともっと強くはっきりとノヴェレの結末 — はっきりとその一色に塗りつぶされているノヴェレの結末 — まで。」と結論づけている。[10]

ノヴェレの最後の段落は、やや最終状態の予示のようであるが、将軍の存在そのものが一つの大きな問題であったのであるから、彼がこのノヴェレで果たす役割を考慮しても、やはり結末の予示とみるべきであろう。[11]

6

これまで、われわれは予示に関しては、この作品における二つの大きな予示について述べた。だが、この物語にはもう一つ、大きな予示が存在することを見逃してはならない。

重要人物であるヴェールトミュラー将軍は、すでに C. F. マイアーの最初の小説『ユルク・イェナッチュ』に登場している。この作品について岡村弘氏は

---

10) 本節のツォーベルの論述については Ebd., S. 34ff. による。

11) 最終状態の予示並びに結末の予示については、Vgl. E.Lämmert: a.a. O., S. 158ff.

次のように述べている。

「この小説の取り扱う時代は十七世紀の前葉、新旧両宗派の宗教的対立と強国の領土的貪欲とが入り交じって中央ヨーロッパを舞台に血みどろの闘争をなしドイツ平野を焦土たらしめた三十年戦役の時代であり、場所は今のスイスの東南隅に当たる一小国ビュンデンである。国内に既に新旧両宗派の軋轢があり、貴族と民衆との階級的反目があり、更に外地たる南方ヴェルトリン地方は必ずしも本国に忠誠ではない。国際的には、この小国が軍事上非常に重要な多数のアルプスの峠路を擁する関係から、スペイン＝オーストリアの旧教国と、自国は旧教国でありながらスペインに対抗するためドイツの新教徒を支持するフランスとの両方から、常に圧迫と脅威を受けざるを得ない。その上、国内の党争は、新教徒はフランスへ旧教徒はスペイン＝オーストリアへと自ら結びつき、国家的独立は方に累卵の危きにある。斯かる国難に面しながら、責任を持って国家の梶を操って行く政治家の一人もない状態を視て、一寒村の新教牧師ユルク・イェナッチュは祖国の前途を憂れうるのあまり、聖書を棄てて剣をとった。そして先ずフランスの名将ローアンを援けてビュンデンをスペインの圧政下から救ったが、やがて、老獪なフランス宰相リシュリューが、ローアンのビュンデン国民との間に結んだビュンデンの独立を尊重する約束を破棄してビュンデンを固く自国の爪牙の中に握りしめようとする意企であることを看破したので、イェナッチュは、祖国を救うためには恩義も忘れ、自己の庇護者ローアン侯爵を裏切ったのである。その上、政治的成果を確保するため、改宗をも敢えてした。先に祖国のために自分の恋人の父を殺害したイェナッチュは今又祖国のために自分の良心と信仰を犠牲にした、そしてこの背信によって遂に祖国の独立を守り通す事が出来たが、この殺人、裏切りの罪に汚れた愛国者は、彼の成功を祝う祝宴の夜、恋人の揮う斧の下に莞爾として倒れたのである。」[12)]

---

12) 岡村弘訳『愛国者』上巻　弘文堂　昭和 15 年　S.179f.　なお、『ユルク・イェナッチュ』の梗概についてはさらに、Vgl. 拙論「C. F. マイアー『ユルク・イェナッチュ』における予示の機能について」徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第二十四巻 1989.　S. 208f.　なお、以下の『ユルク・イェナッチュ』（『愛国者』）からの引用は、原文テキストは、Conrad Ferdinand Meyer: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Besorgt von Hans Zeller und Alfred Zäch. Bd. 10. Hrsg. von Alfred Zäch. Bern: Benteli 1958. から、訳文はわれわれのテキストとは異なるが、上記岡村訳『愛国者』上巻、下巻（昭和１５年）から引用させていただく。ただし、旧漢字、旧仮名遣い、固有名詞の表記、その他、適宜変更させていただいた。

さて、ヴェールトミュラーはこの作品『ユルク・イェナッチュ』においてフランスの名将ローアン公爵の副官として登場している。最初はまだ少年である。家庭教師はイェナッチュの友であるチューリヒの書記官ヴァーゼルに、「こんな難しい教育など、引受けるのぢゃなかんたんですよ。この子供は利発なことはなかなか利発ですが、とにかく、ここだけの話ですが、全く小暴君ですからね。」(上 87)(«Niemalen [...] hätte ich diese schwierige Erziehung übernommen, denn der Kleine, obgleich ein ausgezeichnetes Ingenium, ist, unter uns gesagt, ein bösartiges Dämönlein [...] »(69)) と嘆いている。青年となり、すでに副官となったヴェールトミュラーについて、「凡そ物事を甘く無邪気に観る事の出来ない性質のヴェールトミュラー」(上 125)(Der nichts weniger als arglose Zürcher(101)) という語り手の言葉もある。また、彼を、故郷へ帰るルクレチアを衛る騎士としてローアン侯爵がつけるが、その際語り手の次のような説明があり、ローアン公爵のヴェールトミュラー観が分かる。

> Wohl hatte die Herzogin gegen dieses für die schöne Reisende, wie sie behauptete, in keiner weise passende Geleite zuerst Einspruch erhoben; aber der Herzog kannte die guten und schlimmen Eigenschaften seines Wertmüller nicht erst seit gestern und wußte, daß seinwunderlichen Adjutant sich noch in jeder ernsten Probe ehrenhaft, zuverlässig und tapfer erwiesen hatte.(144)
>
> (公爵夫人はその時この青年士官が美しいルクレチアにとって決して適当な護衛とは言えないと言って反対したが、公爵は自分の副官の長所も欠点も昔からよく知り抜いている、そしてこの一寸風変わりな男がいよいよという時にはいつも立派な、勇敢な信頼するに足る態度を示したの事を見て来て居たので奥方の反対にも拘らず、この男をルクレチアの護衛につけたのであった。)(下 8)

事実、ヴェールトミュラー副官はイェナッチュの危機を救う。またローアン公爵の供をして滞在したクール市での彼の行状の語り手の客観的な報告もあるが、ここでは歴史家シュプレッヒャーの娘アマンチアとチューリヒ市長ヴァーゼルのヴェールトミュラー観を挙げよう。

『説教壇から撃つ』のラーエルを思わせる『ユルク・イェナッチュ』のアマンチアのヴェールトミュラー観は次の通りである。

Die Sprecherin ihrerseits hatte sich in allen Züchten zuweilen mit dem Gedanken beschäftigt, wie sich dieser zürcherische Unband wohl als Eheherr ausnehmen würde, und hatte seine Tapferkeit, den unbestreitbaren Wert seiner Treue an dem edlen frommen Herzog und seine hochgehenden Lebensaussichten mit weisem Herzen in die Waage gelegt gegen seine Schroffheiten, sein absprechendes Wesen und seine Spöttereien über Geistlichkeit und Gottesdienst, die vielleicht doch im Grunde weniger schlimm gemeint waren, als sie übel klangen. Doch war sie — nach dieser rauhen Begegnungen mußte sie sich s gestehen — noch keineswegs zu einem günstigen Ergebnis gekommen. (201f.)

(一方アマンナも淑やかな処女らしい心で、この乱暴なチューリヒの青年は、夫としてはどんなものであろうかと時折考えて見ない事もない。そんな場合、彼の勇敢な事、ローアン公爵に対する絶対的な忠誠、また彼の将来の多望な事、などのいい方面と、不愛想な事、何でも罵倒しなければ気のすまない性質、口程には悪気はないかも知れないけれども坊さんや礼拝の儀式を散々こき卸す癖などの悪い面とを秤にかけて思慮深く考えて見るのである。そして殊に今のような乱暴な彼を見た後では、必ずしも秤はいつも副官に有利な方に傾くわけではなかった。）（下 83）

イェナッチュの学友であり、作品の後半ではチューリヒの市長となっているヴァーゼルはヴェールトミュラー副官に対して厳しい。

Der Bravour und dem aufgeweckten, gebildeten Geiste Wertmüllers widerfuhr von seinem Munde Gerechtigkeit, aber er schüttelte bedenklich den Kopf über des Locotenenten schneidiges und den Widerspruch absichtlich reizendes Wesen, womit er seine Landsleute beunruhige und sich eine unangenehme Berühmtheit in seiner Vaterstadt zugezogen habe. So selten er in Zürich verweile, sei es ihm gelungen, durch seine Ausfälle gegen eine hohe Geistlichkeit Abscheu, durch sein hochmütiges Geringsch ätzen der in ihrer Art interessanten städtischen Angelegenheiten allgemeine Mißbilligung und durch allerlei physikalischen Hokuspokus, der ihn dem freilich törichten Verdachte der Zauberei aussetze, bei dem gemeinen Manne unheimliche Furcht zu erregen. So habe er sich in Zürich den Weg

verrammelt und das Zutrauen einer löblichen Bürgerschaft in alle Zukunft verscherzt, welches doch, nebst einem reinen Gewissen, die Lebensluft des echten Republikaners sei. — «Das Schlimmste aber an dem jungen Manne» [...]«ist sein Mangel an aller und jeder Pietät — denn, ich bitt Euch, innig verehrte — dürft ich sagen innig geliebte! — Jungfer Sprecherin, was ist alles Wissen und Können der Welt ohne die Grundlage eines religiösen Gemütes!»(250f.)

(ヴェールトミュラーの豪胆と機敏とは彼も充分これを認めたが、その剃刀のような敢て人の反感をそそる事を好む性質には賛成出来ない旨を表明し、副官がそのためにチューリヒの人々の顰蹙を買い、悪い意味で有名になった次第を物語った。ヴァーゼルに言わせると、ヴェールトミュラーはチューリヒへは滅多に帰らない、そして帰ってくる毎に、高い地位にある牧師を散々こきおろして市民の反感を買ったり、そう頭から詰らないと言ってしまう必要もない町全体の催し事を糞味噌にくさして人々の非難を招いたり、物理学応用の色々な手品をやって見せて無学文盲な下層階級の連中を魔法使いだと気味悪がらせたりする。そのために彼はチューリヒにおいて栄達の道を自ら悉く塞いでしまい、市民の信望を失った。真の共和国市民にとっては汚れない良心と共に最も大きな人生の喜びである同胞の信頼を失ってしまったのである。—「ですが、あの青年の一番悪い点はです」[...]「神を畏れる気持がこれっぽっちもない事ですよ、お嬢様 — どんなに学問があり手腕があっても、その基礎となる宗教心がなければ、一文の価値もないですからな。」)(下 149f.)

これに対してアマンチアは「顔を赤らめながら」答える。

«Was mir den Locotenenten wert machte», [...]«war seine Treue an dem edlen Herzog Heinrich. Da hat er sich als echten Kavalier gezeigt neben dem Verräter Georg Jenatsch, [...] »(251)

(「ヴェールトミュラー様に、御感心申しましたのは、」[...]「あの方が公爵様に対して御忠義な所なんですわ。その点、あの裏切者イェナッチュと比べて全く立派な方でございました」)(下 150)

だが、ヴァーゼルはイェナッチュを弁護する。

«In einem Stücke wenigstens überragt Georg Jenatsch unsere größten Zeitgenossen — in seiner übermächtigen Vaterlandsliebe.»(251)
(「唯一つの点ではあの男は現代の誰にも勝って居りますよ — それはつまりあの男の強烈な愛国心です。」)(下 150)

ヴァーゼルの言うように、イェナッチュの行動の原理は愛国心である。これに対して、ヴェールトミュラーのそれは忠誠心である。『ユルク・イェナッチュ』においてはもちろん主人公はイェナッチュであり、彼と比べるとヴェールトミュラーの登場の場面ははるかに少ないが、この基本的姿勢という点で、ヴェールトミュラーは主人公のイェナッチュに対比されている人物である。ローアン公爵、ヴァーゼル、アマンチアのヴェールトミュラー観や語り手の報告から、ヴェールトミュラーの頭の切れ味の鋭さ、辛辣な毒舌、茶化しや皮肉、とりわけ聖職者への攻撃などが特徴として読者の脳裏に強く残るのである。ただ、ヴァーゼルの言う市民の信望の喪失は全面的なものではなかろう。ヴァーゼルとヴェールトミュラーは『ユルク・イェナッチュ』においてはアマンチアを巡ってやや恋敵的関係にあるので、ヴァーゼルのヴェールトミュラー評は少し割り引きして考えねばならないであろう。

数々の性癖からヴェールトミュラーが市民一般に敬遠されるのは理解できるが、われわれにとって重要なのは、彼は決して悪人ではない、人を裏切ることがないということである。その点でヴァーゼルの評と違って、毒舌家、皮肉屋にもかかわらず読者にはむしろ好ましい人物であり、特にローアン公爵に対する忠誠一途の態度から判断しても、信用のおける人物なのである。彼の感覚の鋭さは「優しい公爵」を欺いているイェナッチュの行動を決して見逃していない。

Am verdächtigsten war dem Locotenenten die Keckheit, mit der Jenatsch den Herzog über dessen eigene Stellung am französischen Hofe mit schmeichelnden Worten zu täuschen versuchte. Darüber mußte sich Heinrich Rohan doch selber im klaren sein. Was konnte den Bündner dazu bewegen, fragte sich Wertmüller, wenn nicht die teuflische Absicht, den guten Herzog von allen Seiten mit Netzen der Täuschung und dämonischen Irrsals zu umspinnen, um den Sichergewordenen um so gewisser zu verderben? Und sein Haß gegen den Obersten steigerte sich ins Unglaubliche.

(197)

（特に副官の胡散臭く感じた事は、イェナッチュがフランス宮廷において公爵の立場が危殆に瀕している事実を種々阿諛的な言辞を弄して公爵の眼から覆い隠そうとする不敵な態度であった。この事情はローアン公爵の眼にも当然映っている筈の隠れもない事実である。それを猶覆い隠そうとするイェナッチュの意企は公爵を四方から欺瞞と迷妄の網の中に雁字搦めにして、公爵の破滅を確実の上にも確実にしようという意企以外ではあり得ようか、とヴェールトミュラーは考えた。こうして大佐に対する彼の憎悪は益々深刻になるばかりであった。）（下 77f.）

C. F. マイアーの愛読者ならこのような性格と才能の持ち主であるヴェールトミュラーをすでに知っているのである。将軍に対してすでにこのような信頼を抱いている。したがって、『説教壇から撃つ』において最初に牧師ローゼンシュトックが将軍を「いら草」と言おうが、帰郷後一週間の将軍の行状を非難しようが、遺言状のローゼンシュトックに関する件で骰入りのカフスボタンでローゼンシュトックが憤慨しようが、読者はそれらを奇異には感じない。むしろ逆に、ああ、やはり昔のあのヴェールトミュラーだ、変っちゃいない、と安堵し、懐かしさを覚えるのである。昔通りの皮肉屋、毒舌家ではあるが、悪人ではない、悪事を働いたり、裏切ったりして、他人を深刻な窮状に追い込む事はない。読者にはそのような信頼感が残っているのである。したがって、ノヴェレが進行して行くうちに、このヴェールトミュラーが「説教壇から撃つ」というタイトルの予示の未曾有の事件の仕掛人と分かってくるにしたがって、安心感が増して来る。『ユルク・イェナッチュ』のヴェールトミュラー副官も女性のアマンチアに対しては優しく接しているが、『説教壇から撃つ』では、ラーエルは自分の姪であり、自分は彼女の代父でもある。プファンネンシュティールとの最初の対話で将軍はすでに、「行李の荷造りをするまえに、まだ、一人の人間を幸福にしておきたいと思う —」（256）（«Ehe ich meinen Koffer packe [...]möchte ich wohl noch einen Menschen glücklich machen — »(92)）と言明している。したがって、読者はむしろ、どのようにして、そして結果がどうなるか、どのように決着をつけるか、悲劇的見方ではなく、その手腕を期待感をもって待ち望むのである。先ほどのツォーベルの指摘のとおり、「読者をして劇(Spiel)をある程度楽しませる距離から見守らせる」のである。

C. F. マイアーの作品の愛読者はすでにこの先行作品の副官ヴェールトミュ

ラーの人柄を知っている。だから、将軍ヴェールトミュラーがいろいろな問題に直面してどういう態度を取るか、ある程度、予想できる面がある。われわれはこの現象、この作用を、＜先行作品の予示＞と呼びたい。より詳しく言えば、われわれの作品の場合は、＜先行作品に登場した同一人物の予示＞である。

おわりに

ノヴェレ『説教壇から撃つ』において三つの大きな予示を中心に考察した。とりわけ、＜先行作品の予示＞はこれまであまり注目されることがなかった。この予示も、もちろんわれわれのノヴェレだけに存在するものではない。たとえば、とりわけ、名探偵シリーズなどはもっともっと明白な例であり、その予示の作用は比較にならぬほど強力であろう。コナン・ドイルの私立探偵シャーロック・ホームズとその友人であるワトソン博士のように、先行作品に登場する名探偵や、かれのスタッフの性格や能力など読者には先刻承知のことである。読者は、彼等が期待する通りに活躍し、難事件を解決してくれる事を信じて疑わない。

＜先行作品の予示＞は、物語作品の分野で意外に多く存在し、しかも、われわれのノヴェレにおいてもそうであったように、しばしば強力な予示の一つである。